

総論 神と自然の古代学

奈良大学 教授

上野 誠

一 神と自然の古代学ことはじめ

今号では、「神と自然の古代学」をテーマに掲げて、各学問分野で活躍する碩学の人士にご登場願った。そこで、おこがましいことではあるけれども、総論として、私が口火を切ることにしよう。本特集を読む前に、こんなことがらを念頭に置いてほしいのだ。まず、メモ書きしてみる。

① われわれは、神という場合、知らず知らずのうちに、一神教的な神のありようを想起してしまうが、多神教の神々は、妬みもし、罪も犯す存在である。

② 多神教とは、多くの神々がいる宗教ではなく、無限に神が生まれ続ける文化構造と考えねばならない。それは、偉大な

神ではなく、「小さき神々」と呼び得る神であろう。

③ 存在を認識できるすべての事物が、神となり得る宗教の場合、山、岩、樹などのすべてが崇拜の対象物となり得ることを念頭に置く必要がある。

①の考え方に立てば、善も悪も相対化されてしまう。実際に古代に伝えられた神話のなかの神々は、時と場合によって、善なる性が表れたり、悪なる性が表れたりする。須佐之男命は、その典型例といえるだろう。②の考え方に立てば、その国土は、小さき神々がひしめくところとなる。その小さき神々を祀り、その力をいかに人間の幸福と結びつけるかが、この国における宗教者の主たる役割となる。

したがって、日本人は、自らの信仰に対する考え方によって、神と仏を使い分けることもある。厄除け、結婚式、お葬式ごとに、宗教や教団、行くところを選ぶのは、②の考え方が根底にあるからである。こう考えると、アンケートにおいて「無宗教」と答える人びとも、特定の宗教や教団に属さないということだけかもしれないのである。というより、意識もせずに、神仏を使い分けているのだ。

よく神仏習合とか、神仏分離とかいうが、日本人は時に神仏を一つにしたり、分けたりもし、また使い分けたといえよう。それは、奈良時代からあったことだ。例えば、山上憶良（六六〇ころ―七三三ころ）は、遣唐使を送る時には神に祈る歌を作っている。つまり、あれほどの教養人であり、あ

れだけの仏教信仰者であっても、唐と対峙する日本という場合は、日本の神、住吉の神に祈るのである（巻五の八九四）。

③の考え方にたてば、命なきものと命あるもの、神ならざるものと神との区別はあったとしても、常に変更される可能性があると考えねばならない。例えば、人は神になり得るし、人も神としての性格を有しているということになる。また、神も人としての性格を有しているということになる。同じことは、木は神になり得るから、木も神としての性格を有している、といえるのである。

多くの宗教学者や宗教者が「日本の宗教は、その根底にあるものはすべて同じで、万物生命教というべきものであり、山川草木も、大地山河も神仏である」と言い切る理由も、じつはここにあるのである。

二 木と森と神

三十年前のこと。私は、奈良県明日香村を歩いてきた。必死に歩いてきた。『万葉集』を学ぶということは、明日香・藤原・奈良の地理に通じるということでもある。だから、山と山、山と丘、丘と川の位置関係なら

どを体感して、身につけておく必要があるのである。これは、若い時にしなくてはならない学問修行なのだ。そんな、ある日のこと。私は、明日香の川原という集落を歩いていた。ふと見ると、一間四方の板塀の囲いがあり、道に面した一方のみが開いている。どう見ても、神社の玉垣である。

よく見ると、燭台があり、線香を上げる香炉もある。その左側には石灯籠も立っているではないか。石灯籠に目をやると、「天王社」の文字も見えるから、やっぱり神社なのか。玉垣のなかには榊の木が……。私は、なにやら不思議に思っただけで聞いてみた。聞くと、村の人は、ばつが悪そうに、こういった。

もともとここには、小さいながらも天王さんというお社があったのだけれど、火事で燃えてしまったのだそうですよ。お社を再建しようと思って寄付金を集めていたんですが、そうこうしているうちに、榊の木が生えてきて、村で相談したんだそうですけれど、生えてきた榊の木を伐って、そこにお社を建てるというわけにもいかんだろ



天王社

う、ということになったのでしよう。だったら、木をお社の代わりにしようということになりました。ところが、村の者は、わかってるからよいけれど、よそから来た人には、木が生えているだけですからね。そこで、お社の代わりなんだから、粗末になっちゃいかんということで、玉垣を造って、お

賽銭箱を置いたのだそうです。そういえば、賽銭箱は村外の不心得者の被害に遭って、置かないようにしたとか。少し前に。ただ、私もそう聞いているだけで、いつのことかわからないですけれど。そんなこんなので、お社はないけど、神社といえば神社ということになりますかね。へんてこなものになってしまったんですよ。お恥ずかしいかぎりです。

若かった私は、この話を聞いて、胸を震わせた。というのは、社殿が焼失したあとに、そこから生えてきた木を拝もうとする村の人びとの心意に、歴史を超えるものがあると直感したからである。私がここにいる、歴史を超えるものとは、「古代的思考」とも呼び得るものかもしれない。樹木崇拜という原始的な信仰の形態が蘇ったのである。

一般には、神社の社殿の成立は、仏教寺院建築の影響を受けて成立するといわれている。では、社殿がない時代はどうしていたかといえ、祭りごとに、祭りをする土地を決めて、神さまを招いていたのである。

る。そういう神さまがやってくる場所の、それも特定の岩や木が、崇拜の対象になってゆくのである。したがって、古い神社のご社殿の下に、信仰の対象となっている岩（磐座^{いわくら}）がある場合も多いのである。そして、やって来る神を招く場所にも、その土地土地の神々がまたいるのである。

特定の樹木や岩が崇拜の対象となっていることを示す方法が二つある。一つは、その樹木や岩に注連縄^{しめなわ}をかけるという方法。もう一つは、堀で囲んだり、鳥居を建てるという方法だ。垣根や鳥居があれば、特定の木や岩が崇拜の対象になっていることがわかる。そうなると、一定の空間が占有されるのだが、これが「しむ」（＝占める、動詞）ということなのである。山全体を崇拜の対象にするなら、それはシメヤマ（＝標山）と呼ばれることになる。したがって、注連縄とは、特定の空間を占めて、神のいる空間を示す「しむ」ものなのである。

奈良県桜井市の大神神社^{おほみわじんじや}に詣でた人ならすぐにわかることなのだが、この神社は、山がご神体であるから、拝むための建物すなわち拝殿はあっても、ご神体を守る神殿はない。いわば、標山である。ところが、



拝殿の前には、神杉があつて、この巨木の周りを玉垣が囲み、供え物を置く台と、賽銭箱が置かれている。いつ行っても、酒や卵が子供えしてある。では、山が神なのか、杉の巨木が神なのかといえ、両方ということになる。さらには、境内にある特

定の岩には、注連縄が張られて崇拝の対象になっている。

大神神社のある三輪山が神なのか、はたまた杉の木が神なのか。おそらく、どれも崇拝の対象となっているのだから、正解などあるはずもない。

三 ナキサハノモリ

多神教というと、たくさん神がいる宗教と考えてしまいがちだが、じつはそうではない。あらゆる事物が神となり得るのだから、無限に神が生まれつづける文化構造と考える必要はないのである。木があれば木、森があれば森が神になるのだ。私は、国文学演習（万葉集）という科目で、よく学生たちに、こんな話をする。

みんな、『万葉集』の巻二を開いてごらん。そのなかにある高市皇子（六五四ころ―六九六）が亡くなった時の歌を見て下さい。

哭沢之 神社尔三輪須恵 雖禱祈
我王者 高日所知奴

（『万葉集』巻二の二〇二、傍線は、引用者）

とあるね。これを書き下し文にすると、

泣沢の 杜に神酒据ゑ 祈れども
我が大君は 高日知らしぬ

となります。訳せば、「泣沢神社にお神酒を捧げて、皇子の蘇りを祈ったが、皇子は天に昇られてしまった」となるうか。高市皇子が亡くなる時に、その



哭沢神社

延命を祈ったことを、皇子が亡くなったのちに、振り返って作った歌だよね。では、その延命の祈りが行われた場所はどこか。それは「ナキサハノモリ」というところだと書いてある。

ここで注意してほしいことがあるんだ。原文では「神社」と表記しているが、これを「モリ」と訓んでいるね。なぜ、「神社」と書いて「モリ」と訓むことができるか。それは、もともと「モリ」だったところに、神社の社殿ができていったことに由来するのです。だから、社殿すなわち建物がない神社も、古代にはたくさんあった、と考えなくてはならないですね。つまり、「モリ」という場所は、木がたくさんあるところなんだけれども、そこは神さまが来臨する地、ないしは神さまがいらっしゃる地なのですね。神社のある土地や、神社の周辺の地名を調べると、「モリ」とか「のモリ」という地名が、じつに多い。『万葉集』の表記は、時としておもしろいことを、私たちに教えてくれるのです。

かつての私は、「古代的思考」を自らの五感で実感しようと、日々、東奔西走していた。一方で、私は、この三十年というものの、万葉学徒のひとりとして、自分なりに、古代生活と万葉歌の回路を見つける研究方法を模索してきた。このような歌の表現が使用される背景には、こういった古代を生きた人びとの生活実感があるのだな。だから、このような表現をするのだな、と試行錯誤を積み重ねてきた。

四 排泄物も神となる

そこで、これまでの考察を踏まえ、『古事記』についてみてみよう。『古事記』上巻に収められている国土形成神話は、男女二神の性交によって、島々が生まれたと説く。しかし、性交によって国土が生まれると説く神話においては、女性神が死ななくては、神話は終息しないのである。女性神が死なないと、永遠に国土が生まれ続けるからである。したがって、『古事記』の伊耶那美神も、死ななくてはならぬ運命にある。

『古事記』『日本書紀』では、火の神である火之夜芸速男神を生むことで、女性器が焼け爛れて死ぬ話になっている。火の神を

生んだ伊耶那美神は、体を病み、嘔吐し、大小便の排泄をして死を迎えたと書かれている。ここでは、紙数の都合で、『古事記』の訳文のみを掲げておこう。

次にお生みになった神の名は鳥の石楠船の神、この神はまたの名を天の鳥船といひます。次に、大宜都比売の神をお生みになり、次に火の夜芸速男の神をお生みになりました。またの名を火の炫毘古の神、さらにまたの名を火の迦具土の神と申し上げます。この子をお生みになったために、伊耶那美神は御陰が焼かれてしまひ御病氣になつてしまわれました。その嘔吐でできた神の名は金山毘古の神と金山毘売の神、尿でできた神の名は波邇夜須毘古の神と波邇夜須毘売の神、小便でできた神の名は弥都波能売の神と和久産巢日の神です。この神の子は豊宇气毘売の神といひます。かような次第によりまして伊耶那美神は火の神をお生みになったために遂にお隠れになつてしまわれたのでございます。天の鳥船から豊宇气毘売の神まで合わせて八神ということになります。

(拙訳)

つまり、吐瀉物や排泄物からも、次々に神は生まれたまうのである。さて、大小便がなされ、尿よりなつた神のなかに、和久産巢日神がいる。この神名は、若々しくみなぎつた力によって、万物を生成する力を持つとの意味が込められているのだが、ここは排泄物が、堆肥となつて、食物を生み出すということを神話的に表現しているとは見なくてはならない。というのは、尿から生まれた神のひとりに、この和久産巢日神がおり、その子が豊宇气毘売神と記されているからである。「ウケ」とは、食べ物のことをいう古語であるから、豊かな食物を生み出す女性神ということになる。国土を生み続けた女性神が火の神を生み、病を得て、その後には排泄した排泄物が、食べ物の神となるというのである。

多神教においては、山川草木だけではなく、排泄物すら神となるのである。この一言をもつて、本特集号の、わが拙き序に代えたい、と思う。